

聖書：使徒 13：1～12

説教題：聖霊に遣わされて

日時：2014年1月5日

使徒の働きはこの13章から後半部がスタートします。これまではエルサレム教会が中心となって話が進められて来ましたが、ここからはアンテオケ教会が中心となって話が進められます。従って主な関心はユダヤ人の間での話から異邦人世界における宣教へと移ります。そして中心人物も十二使徒のリーダー・ペテロから、異邦人宣教の器パウロへと変わります。今日の箇所はその世界伝道に関する最初の導きが与えられる場面についてです。以下、三つのポイントで見て行きたいと思います。

まず今日の箇所から学ぶ最初のポイントは、宣教を主導される聖霊ということです。1節を見るとアンテオケ教会には多士済々のリーダーたちが集まっていたことが分かります。一人目のバルナバはこれまでも随所に出てきた有能な働き人です。バルナバは「慰めの子」という意味ですが、その名の通り、彼はどんな人をも慰め、励まし、勇気づけることのできる器でした。サウロを見出し、表舞台に引っ張って来たのも彼です。二人目のシメオンは「ニゲル」と呼ばれるとあることから、黒人であったと思われます。多くの人は、イエス様の十字架を背負ったクレネ人シモンではないかと想像します。しかし同一人物なら、なぜルカが福音書ではシモンと記し、ここではシメオンと記したのか、疑問が残ります。いずれであれ、このシメオンは南の地方出身の人だったと考えられます。三人目はクレネ人ルキオ。クレネ人は北アフリカ地方に住む人々のことです。彼もまた随分とアンテオケからは遠い地域の人であったことが分かります。11章20節にはクレネ人がアンテオケに来てからギリシャ人にも語りかけたと記されていましたから、このクレネ人ルキオは、アンテオケ教会設立者の一人であったかもしれません。4人目は国主ヘロデの乳兄弟マナエン。この国主ヘロデは、ヘロデ大王の息子で、バプテスマのヨハネの首を切って盆に載せたことで有名なヘロデ・アンティパスのことです。その王子と一緒に宮廷で教育を受けた彼が、今やキリスト教会の指導者になっていた。同じ環境で育ちながら、一人は国主となってキリスト教会を迫害し、一人はキリスト教会のリーダーとなっていた。神のみわざの不思議さを思わされる一節です。そして五人目はタルソの出身サウロ。このように様々な異なる背景を持つリーダーたちがアンテオケ教会に集まって仕えていました。

しかし注目すべきは、この彼らが集まって話し合い、知恵を出し合い、作戦を練って、異邦人宣教を進めて行ったのではないということです。今日の箇所が述べていることは、聖霊が「バルナバとサウロをわたしのために聖別して、わたしが召した任務につかせなさい。」と言われたということです。聖霊は超自然的な声を持って語られたのでしょうか。それよりもありそうなことは、1節で紹介された預言者の中の一人を通して示されたということでしょう。あるいはバルナバやサウロ本人に対して示されたということであったかもしれません。詳しいことは分かりません。しかしはっきり述べられていることは、これは聖霊から始まったということです。

この御心はどんな状況で示されたのでしょうか。それは彼らが主を礼拝し、主の御心を伺っていた時でした。人間の考えが先ではありませんでした。ですから大事なことは、聖霊の御声に

聞くということです。私たちが主を真心から礼拝し、御声に聞き入るなら、主が礼拝のただ中でこのように語ってくださる。もちろん御声に聞くなら、いつも宣教のことばかりが示されるわけではありません。しかし今日の箇所から心に留めさせられたいのは、神ご自身がこの宣教の心、宣教の熱心を持っておられるということです。この13章以降見て行く世界伝道の働きは、他ならぬ神のリードによって始められたのです。私たちは自らを振り返って、この宣教の「心」を持っているのでしょうか。この神のお心を自分のものとして共有しているのでしょうか。さらにさかのぼって私たちは正しく神を礼拝している者たちでしょうか。

二つ目に見たいポイントは、この神の御心に応答するアンテオケ教会の姿です。このアンテオケ教会は11章19節以降で始まったばかりの教会です。世界第3の都市で様々な人々が行き交い、勢いをもって成長しつつあったとは言え、まだ設立されて日の浅い教会でした。そんな中で聖霊の示しがありました。しかしその内容は非常にショッキングなものだったのではないのでしょうか。聖霊は「バルナバとサウロを聖別して、わたしが召した任務につかせなさい」と言われました。バルナバとサウロと言ったら、1節で見た5人の中で最も重要な二人と言えます。この二人を送り出してしまったらアンテオケ教会はどうなってしまうのか。もっと別の人を送るのではダメなのか。せめて一人は別の人にしてもらうことはできないのか。そんな声が上がってもおかしくありません。ところがアンテオケ教会はこの聖霊の示しに従ったのです。

それにしても何という人選でしょう。もし私たちがこの場にいたら、思わずうめいてしまいそうです。しかし自分には最善のものを取っておいて、他の人には2番目、3番目のもの、あるいはいらぬものを差し出すというのは聖書の原則にかなうことではありません。イエス様はご自身の持てるすべてを、そのいのちまでもささげてくださいました。ですから他者の益のためには一番良いものを送る。ベストリーダーを送る。これはイエス様の心を映し出す教会の姿と言えます。アンテオケ教会は痛みもあつたでしょうが、喜んでベストをささげることのできる人たちでした。

そして彼らは断食と祈りをしました。2節でも主を礼拝し、断食をしていた彼らでしたが、聖霊の御心が示された後も、まず断食と祈りをしました。これはこれから送り出す二人をとりなすための断食と祈りだったのだらうと思います。ここに彼らは今回のことを単にバルナバとサウロに関わる個人的なことを考えなかったことが示されています。むしろ彼らはこれを自分たちにも関わりのあることとして、すなわち教会のわざとして考えた。二人の上に手を置いて送り出したのも、教会として彼らを派遣するためでしょう。先に見たように、世界宣教の御心を示し、バルナバとサウロを聖別せよと命じたのは聖霊です。そういう意味で遣わす一番の主体は聖霊です。しかし教会はその御心を受け止め、教会として送り出すのです。よく世界伝道旅行のことが、パウロの第○次世界伝道旅行と表現されますが、それはパウロ個人による伝道という意味ではないのです。これから見る世界伝道旅行は、むしろアンテオケ教会による伝道のわざです。ですから14章26節では、一回目の宣教旅行を終えたパウロとバルナバがアンテオケ教会に戻って来て報告します。「そこは、彼らがいま成し遂げた働きのために、以前神の恵みにゆだねられて送り出された所であった。」

私たちはここから宣教は聖霊に導かれて行なう教会の働きであることを心に留めたいと思います。宣教は一人が示されたと言って勝手に行なうことではありませんし、あるいはその働きに当たる人に任せっきりにすることでもありません。バルナバとサウロは聖霊により、教会

を通して派遣されました。宣教は聖霊のわざであり、また聖霊に従う教会のわざなのです。

三つ目に見たいのは、宣教の現場で助け導いてくださる聖霊についてです。4節に「ふたりは聖霊に遣わされて、セルキヤに下り、そこから船でキプロスに渡った」とあります。すでにこのキプロスには福音が宣べ伝えられていたことが11章19節に記されていましたが、このキプロス島はバルナバの故郷であったこともあったのか、まずここから本格的な宣教旅行が開始されます。そして東海岸の町サラミスに着くと、ユダヤ人の会堂で宣教を始めます。まずユダヤ人の会堂から宣教を始めるというのは、以後の伝道旅行のパターンとなります。そして島全体を巡回してサラミスとは反対側の西岸の町パボスに行った時の出来事が詳しく記されます。ここでは地方総督のセルギオ・パウロという人がバルナバとサウロを招いて神のことばを聞きたいと願っていました。聖霊はこうして異邦人が御言葉に心を開くようにと導かれました。

しかし、事はスムーズには運びません。この素晴らしい状況を前にした時、反対活動も起こって来ました。何と総督のもとには、名をバルイエスというユダヤ人の魔術師がいて、総督が神の言葉に心を開こうとするのを見て邪魔し始めたのです。これまでおいしい仕事にありついていたのに、これでは自分の地位が危うくなると思ったからでしょう。このように福音を語る時には悪の力も働き始めるということ、スムーズに事が展開するよりも思わぬ妨害活動が生じるということをこれは示しています。

そんな中、9節に「しかし、サウロ、別名でパウロは、聖霊に満たされ、彼をにらみつけて」とあります。ここで初めてサウロというこれまでのユダヤ式の名前から、パウロというローマ式の名前に呼び方が変わります。以後、彼の呼び方はずっとパウロとなります。これはこの出来事をきっかけとして、彼の新しい歩みが始まったことを暗示します。このパウロが聖霊によって、バルイエス（魔術師エルマ）にさばきの言葉を語ります。「ああ、あらゆる偽りとよこしまに満ちた者、悪魔の子、すべての正義の敵。おまえは、主のまっすぐな道を曲げることをやめないのか。見よ。主の御手が今、おまえの上にある。おまえは盲目になって、しばらくの間、日の光を見ることができなくなる。」この結果、バルイエスはただちに目が見えなくなります。「しばらくの間」というのは、これが警告的なものであったことを示しています。彼が悔い改めるならば、赦しを得る可能性も残されているものとして、この処置がなされたのです。私たちがここに見るべきは、9節に「聖霊に満たされ」とありますように、これは聖霊のわざであるということです。すなわち聖霊は宣教の御心を示し、働き人を遣わすだけでなく、遣わされた者と共に働き、導いてくださるということです。

この結果が12節にこう記されます。「この出来事を見た総督は、主の教えに驚嘆して信仰に入った。」このキプロス島における総督セルギオ・パウロの回心は、これからの世界伝道にとって大きな意義を持つ出来事だったに違いありません。かねてから異邦人宣教に召されていたパウロは、この13章で改めて聖霊にそのことを示され、また教会から遣わされて異邦人宣教のわざに当たり始めました。そして最初の宣教地で様々な妨害活動があったものの、当時のローマ世界を象徴する一人の総督の救いのために、このように仕えることができました。聖霊はこのようにして宣教の働きを主導して導いてくださる。パウロにとってこの出来事は、以後の彼の活動に大きな励ましと展望を与える出来事であったに違いありません。

そしてこの記事は、これを読む今日の私たちにも同じ励ましと展望を与えるべきものでしょう。聖霊は、使徒の働きという書物の中にだけ閉じ込められているお方ではありません。聖霊

は今日に至るまでずっとこれと同じ働きを進めておられます。その聖霊の働きによって私たちも救いへ導かれました。そして私たちは今こうして主を礼拝しています。この礼拝は聖霊が今なお私たちに語りかける重要な場です。そして聖霊は今度は今日の私たちを遣わし、用いてくださいます。確かに皆がパウロと同じ意味で世界を駆け巡る宣教師になるわけではありません。しかし私たちはこの礼拝で、主の御心に聞きます。主は宣教の心を強く、深く、熱く持っておられます。その御心を分かち合っていたいただいた者たちとして、その御心を今や自分の心として共有している者として、私たちもまたこの礼拝の場から、それぞれのところへ聖霊によって遣わされるのです。聖霊は遣わすばかりではなく、私たちが出て行くところにも共にいてくださいます。困難や反対活動は当然のこととして起こるでしょう。しかし共にいてくださる聖霊により頼むことによって、聖霊が道を開き、私たちが宣教の御心に仕えることができるように助け導いてくださるのです。

この一年も私たちは自分の思いをまず先に持って来るのではなく、真に礼拝をささげること  
に心を注ぎたいと思います。そして聖霊が語ってくださる御声に耳をそばだてたいと思います。  
聖霊はそのような私たちに御心を示し、一人一人をその御心のために遣わしてくださいます。  
そして宣教の現場でも私たちと共にいて、私たちを用いてくださいます。その聖霊のわざに信  
頼し、宣教の働きを共に担う主の教会の歩みをこの年も導かれて行きたいと思います。